

岡潔博士の奈良 生誕百年の記念に

平岡佳子 Yosiko Hiraoka

平成12年(2000)8月22日(火)

1 数学者 岡潔 理学博士 の生誕百年

「僕は、西暦と歳が同じなんだ。1901年生まれ。
うまくなってたのに、近頃、満年齢と言うものが現われて、
自分の歳が分からんようになって来た。アハハハ-----」

岡先生は、御機嫌のよい時、お講義の途中で、首をかしげ
ながら、よく、こんな風におっしゃった。

生誕百年の定義 を私は知らない。

生まれた年に 100 を加えるのか

生年から数え始めるのか

だが、岡先生は、**救え年** が大好きだったのだからと私は、
「2000年でぴったり数えの百歳」の今年を生誕百年として
春の早稲田大学での日本数学会年会の数学基礎論および歴史
分科会に於て、岡先生を讃え、20分間お話をさせて戴いた。
併し年会では一般に一人の持時間が短く、言い残した事も多い。
そこで、この数学史の研究集会で、奈良の風土も交えながら
恩師「岡潔博士」の在りし日のお姿をお話し申し上げたい。

2 理学博士「岡 潔」奈良女子大学教授に就任

思えば遠い昔、昭和24年の初秋「古都奈良の学び舎」
 奈良女子高等師範学校 理科一部 4・3・2 年生） 合計
 新制の奈良女子大学 理家政学部数学科1 年生） 約60名が
 大きい教室に集められた。昭和24年7月31日 附で就任の
 理学博士「岡 潔 教授」の紹介の爲である。

数学科主任 半田正吉教授が、教壇の向かって左に立たれ、
 それに続いて入室された岡教授は、入口に近い向かって右に
 立たれた。白いカッターシャツに、ノーネクタイだったが、
 まだ暑いのに、薄茶色の背広をきちんと召され、両手を下に
 真っ直ぐ伸ばし直立不動の姿勢、微動だにしない。ポマードを
 つけて居られない髪の毛が上に広がり、縦長の2等辺3角形
 を逆さにした様な大きな頭が、長身の体の上に乗って居るのが
 印象的だった。紹介が終ると、ピョコンと御辞儀をされたので
 はっ！となったが、一瞬の静寂の後、ずっしりと重そうな
 脳味噌一杯の世界的な数学者の頭は、無事に細い体の上に。
 お体が、そしてお心も、「しなやか」だったのだ。

岡教授の講座は、奈良女子大学の時間割に組まれて居たが、
 奈良女子高等師範学校（以下 女高師 と略記）の学生も
 自由に聴講してもよいと言う事なので、当時、女高師4年生の
 私達も、受講する光榮に浴した。

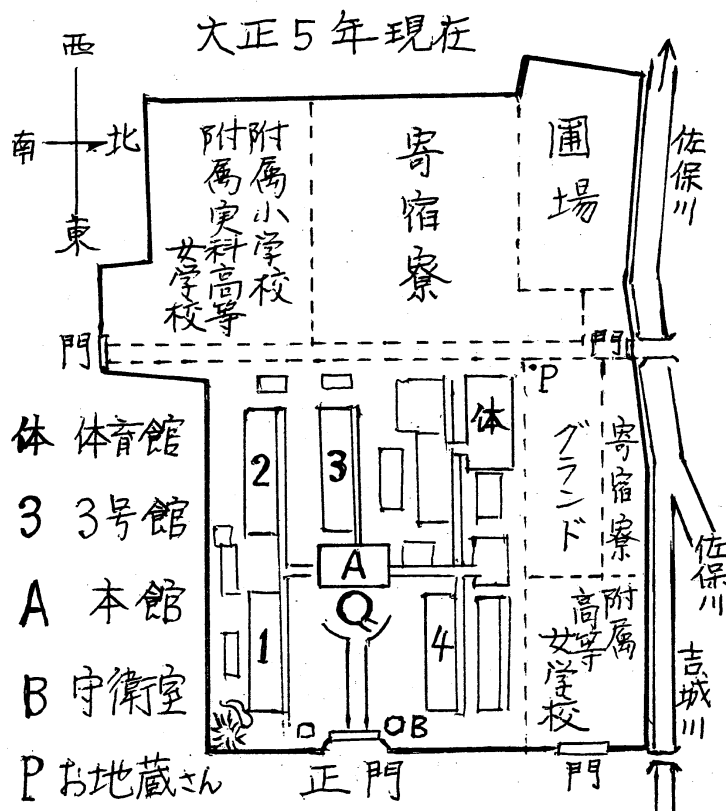
3 奈良女子大学の沿革と数学教室の変遷

奈良女子大学六十年史(昭和45年3月25日発行)によれば、日清戦争直後から10余年に渡る奈良市・県の官立学校誘致の動きがあったが、政府に財政的余裕がなく時日を重ね、やっと日露戦争後、「勅令第68号」をもって、奈良女子大学の前身**奈良女子高等師範学校**が、奈良奉行所跡の**奈良市北魚屋西町**に(2万有余坪の土地)
明治41年(1908)3月31日設置され

翌 42年(1909)4月29日第1回入学式が挙行された。

授業開始は 同年 5月1日 この日を**開校記念日**としている。

奉行所跡地は、県有の監獄移転新築予定地だったが、絞首台を聖武天皇陵から見下すのは「不敬」なので、見合わされていた土地であった。



初代校長は文部省視学官
野尻精一 第1期生77人
女子教員の養成を目的に
女性の最高学府として
発展して来たが、

昭和27年3月、40期生の
卒業を以て幕を閉じた。

奈良女子大学は

昭和24年(1949)5月31日発足
同年 7月6日 第1回入学式

昭和22年2月27日、明治42年10月25日竣工の木造平屋3号館
数学・物理教室が全焼した。消防車が全然来ず(前日に火災があり
 出動態勢不備だったとか?)私達は戦時中の防火訓練のバケツリレーや
 寮の消火ポンプ等で放水し、類焼を防いだ。渡り廊下に燃え移ると、
 その東は本館、必死だった。漏電が原因だったらしい。

昭和23年度に、女高師は、翌24年の新制大学発足に向けて
 同窓会(社団法人佐保会)所有の建物を借り受けて改造し、
「8号館」と命名して、**数学科の教室**と一般教養教室とした。

その建物は、奈良女子大学^{六十年史}_{八十年史}によれば昭和6年4月15日開校の
 佐保会経営の「佐保女学院」の入学者が、全国的になって来た為
 寮として、女高師の正門より東北約3分の **奈良市西笹鉾町43番地**
 に建てた昭和18年(1943)竣工の木造2階建(一部平屋^{4月10日竣工}約70人収容)

土地面積 1055坪95合 建物延坪 246坪5合

佐保女学院は、戦局激化により、昭和19年から21年3月迄一時
 閉鎖されたので、昭和19年4月1日からは戦没者寡婦(戦争未亡人)の爲に
 厚生省と文部省の協力により軍事保護院(敗戦後厚生省勤労局に吸収)
 (昭和22年9月労働省に移管)
 の事業として、女高師に設置された家政科(修業年限3年)の
 「奈良特設中等教員養成所(特中と略記)」の寮として使用されたが
 昭和23年3月、特中2期生の卒業を以て寮の幕は閉じられた。

昭和35年に数学教室は附属中高移転跡の木造2階建校舎へ。
 現在は、附属小学校跡地に建った鉄筋の理学部のビル内にある。

4 「8号館」の岡先生

8号館、それは **数学教室** の別稱の様なものである。その2階に女高師以来の数学科の先生(下記)と助手の教官室が出来、(半田正吉・矢野建治・宮本富美・富山興太郎 の4先生)数学科の学生は、8号館へ上履を持って通う事になったが、昭和24年に、岡先生と非常勤講師用に教官室がもう一つ出来たが、「**世界的な数学者の研究室**」が、ブラックとは言はない迄も、戦時中に急造された木造の部屋に「机だけポツンと」だが仙人の風貌の岡先生には、素朴な木の肌 が似合って居た。また、廊下を歩かれても、シミシガタガタ言う筈の厚くない床が、何の音も立てない。何時も爪先立って居られるのか、忍者の様だった。

お講義は「**集合論**」だったが、ある時突然教壇の端へ行き右手を上げて「崖っぷちに立ってるんですよ」と言はれ、手を静に下ろして、垂直になった教壇の下を覗き込む様にされたので皆驚いたが、後年になって考えると、昭和24年(1949)と言へば戦後の食糧難・物資不足は続いて居たが、巷に歌謡曲は流れ映画館は満員、笠置シズ子か、大佛さんの掌の上でブギウギを歌ったとか言う話もあって(真偽の程は?) 日本は、大東亜戦争の苦しさを忘れたかのように、お祭騒ぎの様なムードに浸り始めた時期だった。

「**治に居て乱を忘れず**」との警告だったのかも知れない。

春の日本数学会の発表で、最初(昭和24年度)のお講義を「函数論」と言ったが「集合論」に訂正する。

私が就職した昭和25年頃は、住宅難で、条件の良い下宿を探して何度も引越すうち、岡先生の講義ノートを紛失してしまった。板書された集合の記号は、脳裡に強烈に焼き付いていたが、御専門の函数論の準備として、集合の話とされたのだと思い込んで居たし、事実、後述する聴講生として受けた講座では、函数論の序説が集合の章であった。

ところが、九州大学の高瀬正仁先生に、岡先生の日誌には「奈良女子大から依頼されて集合論をやる事になったので急いでハウスドルフの本を読み始めた」と書いてあると教えられたので同窓生に尋ねたところ、函数論・集合論の両論だった。助手で残られた吉松(当時、池田)幸子さんは集合論と言はれたが、念の爲、大学へ問い合わせると、庶務課の小刀祢英樹文部事務官を通じて理学部 魚廬 武志 教務主任 より次の回答があった。(平成12年10月23日付)

昭和24年の岡潔先生の担当科目 集合論 単位数4

函数論(4単位)は昭和27年度の開講でした

吉松さんは、「岡先生は前庭の花をよくじっと見つめて居られた。また何時も背広で、カッターシャツだけと言う事はなかった」と言って居られ、8号館の寮監だった外山倭文子先生(女高師大正7年理科卒)も、岡先生のお姿を「ふと見出で涙わきしか花園の花に無心に講義いませし」

5 グルサーの輪読と岡先生の厳しさと優しさ

私は、京都市の公立高等学校に勤め、5校を歴任したが、定時制高校教諭の時期、2年間 奈良女子大学の聴講生となった。

昭和34年度の岡先生の授業は輪読で **GOURSAT** の **COURS D'ANALYSE MATHÉMATIQUE**

1クラス20名なので、私は21番の名簿番号を貰ったが、1番、6番、13番、----という風に飛びとびに当てられる。

訳し方が納得いかぬと、「日本語になってないじゃないか。」

「何処が分からんのだ」 皆、しーんとして居ると ----

『**分からん**』を **分かる** を、**分かる** と言う」と諭されたが、うまく訳すと、満面に笑みを湛えて喜んで下さった。

また黒板の端から端迄「萬葉集の歌」を書いて下さる時は、一息入れる事が出来た。諳んじて居られ、流れる様に書かれた。その優雅な字の如く、厳しいけれど、優しい先生だった。

ある時階段を降りようとする、登って来られる 岡先生とばったり、先生を見下ろす形になったのに、**にっこり** なさって、「僕の部屋へ話をしにいらっしやい」ー聴講生なのに、声をかけて下さって有難い。だが、えらい人の前では体が固くなってしまふ自分。でも勇気を出して、放課後お訪ねすると、先客の学生が一人、先生と向かい合って坐って楽しそうに話して居る。(助手の人は居られない様だった。) 育った時代の相異を感じて居ると、

「こっちへいらっしゃい」とおっしゃって、廊下側の窓ガラスの所に掛けてある比較的小さい額の画の前へ連れて行かれた。

「い、画でしょう」-----だがそれは、セザンヌだか何ザンヌだか知らないけれど、薄ぼんやりした樺色と水色の画で、小舟に人が乗ってるのが何とか分かる様な、お義理にも、私には良い画とは思えなかった。「い、でしょう」重ねて先生のお声でも、小学生でも、もっとはっきり分かる様に画くと思った私は黙って、先生のお顔と画を交互に見つめて居た。

「い、画ですね」それでも頑固に黙り続ける私に、先生は「分かりませんね」私は思はず「はい」と答えた。そしたら先生はにっこりなされた。私は、ほっとした。若し分かりもせぬのに分かった様な顔して頷いていたら、大喝一声されていたかも知れない。剣の達人の抜く手も見せぬ技の様に、岡先生は、「直感」で人の心を見抜いてしまはれるのだから。

また或る日、法蓮と言う所を歩いて居たら、着物姿の先生にお会いした。(先生は、和服がお好きだったと聞く。)この時も「コンパスを買いに行ってたんですよ」と先生の方からお声を。週に一度の講義を受けるだけの学生の顔を覚えていて下さる先生の温かさ、「お家へお帰りですか、お供しましょう」とでも言えば色々お話もして下さったであろうに、私は、しどろもどろ、何と私は、機を見るに敏でないのかと、後で残念に思った。

6 岡先生の生い立ち

奈良女子大学庶務課より戴いた「岡潔博士の紹介」によれば岡先生は、明治34年(1901)大阪市生まれ。1904年、父母の郷里和歌山県伊都郡紀見村(現在の橋本市)に帰り、祖父母と両親の薫陶のもとに、幼年期と少年期の大部分をこの地で送られた。

「僕は4月生まれなんだ。なのに父親が、どうしたものか3月生まれとして届け出て居る。粉河中学を受けたが落っちした。翌年、も一度受けて入学出来たが、1年早く小学校へ行ってるのだから、ここで辻褄合うて元通りになった。」

これも御機嫌の良い時、教壇での笑顔のお話である。難しい函数論に、緊張し続けて居た私達は、世界的な数学者にして、ストレートでなかった事に、少し氣が楽になった。

奈良女子大学庶務課で、入事記録を調べて戴くと、

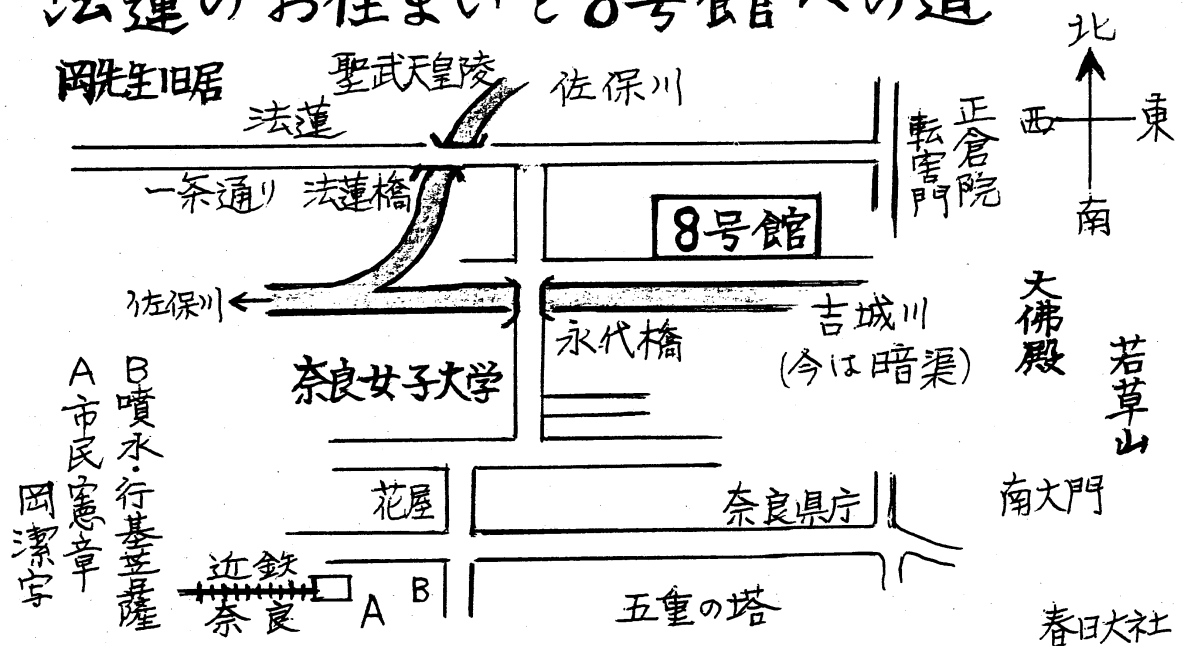
明治34年(1901) 3月19日 生まれ (大阪市)

本籍地：和歌山県 橋本市 柱本 929 番地

昭和49年2月2日の朝日新聞の「父ありき」の文章に

「-----父の期待にそむいて 粉河中学受験に失敗した。-----高等小学校へ一年通って翌年合格。四月生まれの、岡さんの出生届は、父の手で一月早く三月生まれで出されていたので、これで出生通りの入学となった。---」と述べられて居るから、私の聞き違いでなく、本当の話である。

7 法蓮のお住まいと8号館への道



岡先生が、紀見村からお通いになるのは大変なので、
数学の矢野先生が中心となられて、教職員の方が家を探され
「奈良市法蓮佐保田町 686の1」に庭のある家が見つかり、
昭和26年(1951)に入居された。法蓮は奈良女子大学関係の方が
澤山お住まいの閑静な住宅地である。

岡先生は佐保山の南のお家から、細い坂道を降り、一条通りを
東に向かって歩かれ、聖武天皇の御陵を左肩に見ながら、
佐保川に昭和6年6月に架けられた小さな法蓮橋を渡って
数メートル歩いて右へ曲がり、真直ぐ南へ。今は暗渠になった
吉城川の永代橋を渡らずに左へ曲がると、東への一本道の向こうに
若草山と大佛殿の屋根が見える。

山焼き後の若草山は、枯葉色から文字通り若草色に変わって行く。
真横から見る大佛殿の屋根は、丁度 2等辺3角形。

天氣の良い日には、頂点の**鵠尾**が**金色**にピカッと光って見える。
そして、**数学教室8号館**は、間もなく吉城川沿いの道の左に。

時が流れ、8号館は昭和35年3月、佐保会へ返還されたが、
昭和40年に佐保女学院が昇格して、奈良市鹿野園町に開校した
佐保女学院短期大学(43年に 奈良佐保女学院短期大学と改名
平成13年度からは男女共学となり、奈良佐保短期大学と改名する)
の建設費の爲、土地建物共に昭和44年3月、大和ハウスに売却され、

「**数学科の古里 8号館**」は跡形も無い。

今年5月、一度伺った事のある岡先生の旧居、法蓮を訪ねた。
「須川巖」様がお住まいで、「父が戦後ある地主から、この辺の
土地を買う事になった。古い家が一軒建って居た。入居される
岡先生は、「僕は家が必要なのだから、土地は要らない」と言って
家だけ買はれたので、父はその敷地も含めて周辺の土地を買った。
岡先生が新薬師寺の近くに家を新築して引っ越される時、この家は
要らないと言はれたので、建て替えて住んで居るが、玄関と座敷の
位置は前と同じです。冬に狸が佐保山から子連れでやって来る」と言われ、
奥さんは「小学校の時、岡先生の家で、よく遊ばせて貰った。
玄関入った所にピアノがあった。あの頃ピアノのある家は珍しかった。
また、庭のこの辺に咲いてる**花**を、岡先生は、**嬉しそうに**、よく
見て居られた。坂道の所の木は昔の儘です。」と話して下さった。
須川様御夫妻は勿論、御近所の方も岡先生を懐かしんで居られた。

8 岡潔博士 文化勲章 授章

昭和33年5月、大学構内にあった女高師附属高等女学校の校舎をその儘使用して居た新制の附属中学・高校が、奈良市紀寺町の旧第53連隊練兵場跡に建てられたアメリカ軍の病院の撤収跡を、国立奈良病院と2分して使う事になり、その東の部分に移転したので、**昭和35年(1960)4月**、数学教室はその跡へ移り、岡研究室は2階のどん突きの特設教室だった広い部屋を占める事が出来、男子の大学院生もゼミにやって来た。東と南の窓際に教室用の2人使用の細長い机が並び各自一つ占有の贅澤で自由な空間が出現し、昭和30年卒(大卒3回)の同級生「岡教室の3人娘」早川玲子(後に 藤田 収 教授と結婚)

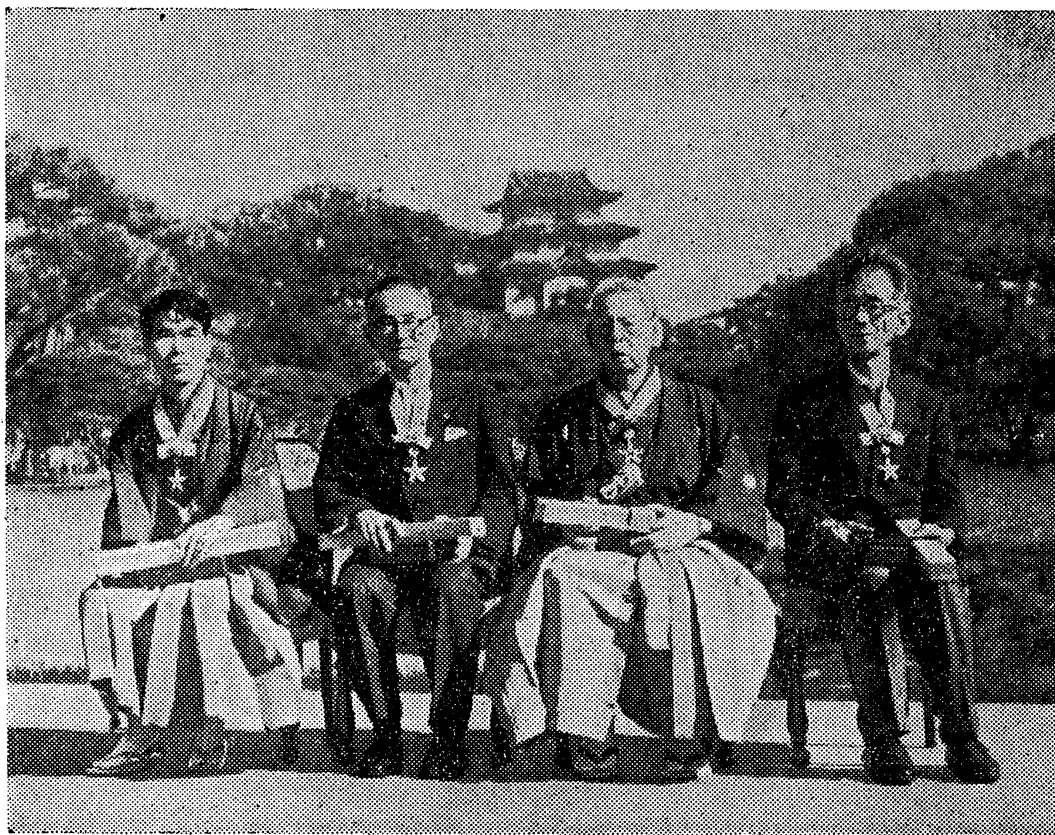
鯨岡すがね(岡先生長女) 安田冬子(旧姓林 後に ^{大阪医大} 助教授)さんが常駐。

また図書室も出来、学生の勉強も本格的に出来る様になった。そして、**秋には、岡先生の文化勲章**と言う、大学挙げての喜びが。今年春の日本数学会の発表で、私は次の言葉で結ばせて戴いた。「文化勲章」授章式 から戻られた最初のお講義の時、「フランス語の本は、何を書いてあるかと、後から開ける」と、椅子に坐って、俯いて、目次のページを繰られた。その何時もと違う仕草に私は、「**少年のはにかみ**」を感じた。花束でなくても、菊一輪差し上げればよかったのに-----今日、日本数学会の皆様へ、岡先生のお姿をお話しする事で、おくれませの、私のささやかな**花束**とさせて戴きます。

日(夕刊) 昭和35年(1960年) 11月3日 (木曜日)

晴れやかに岡教授ら

文化勲章授章式行われる



喜びの四氏 左から吉川英治氏、田中耕太郎氏、佐藤春夫氏、岡潔氏(皇居仮宮殿中央玄関前で)

「文化の日」の三日、この日の文化勲章授章式が天皇陛下ご出席のもとに皇居で行われた。この日、晴れの受章者の数学者、奈良大教授岡潔(左)、日本芸術院会員作家、佐藤春夫(右)、前最高裁長官、日本学士院会員、田中耕太郎(右)、作家、吉川英治(左)の四氏は午前十時ごろ坂下門から皇居にはいった。岡、田中両氏はモーニング、佐藤、吉川両氏は羽織はかま姿、池田首相荒木文相とともに式場の仮宮殿西の間でお待ちするうち同十一時モーニング姿の天皇陛下が文化勲章をつけておいでになり式が始まった。

池田首相からそれぞれ黒塗りの箱にはいった勲章と白木の箱にはいった勲記が贈られた。その後、一同は薄紫の綬に純白の五弁のタチバナの文化勲章を首に掛け、仮宮殿中央玄関前に現われて丸池や富士見やぐらを背景にカメラにおさまった。

正午から表一の間で皇太子さま、三笠宮さまも同席されて昼食会が開かれたのち表三の間のお茶の席に移り、各受章者がそれぞれの分野についてお話し、陛下から「これからもしっかりとやるように」「と励ましのお言葉があった。

☆奈良女子大学教授(奈良大は誤記)

☆

昭和35年10月31日発行

報 会 保 佐

第 6 7 号

佐保会報

第 6 7 号

発行 者 佐 保 会
編輯 者 植 村 圭 子
水 木 と し

岡潔教授文化勲章授賞せらる

文化の日にさきがけて十月七日、第二十回文化勲章の受賞者が内定したが、本学理学部教授、岡潔博士は

教授を経て、戦後昭和二十四年、本学教授として赴任された。教授の御研究は「多変数解析函数」という函



数理論で、数学界に果された功績は非常に大きい。大学卒業後フランスに留学された折、この研究を思いつかれたというのだから、三十年余りをこの道一筋にかけられたのである。今回同時に受賞する田中耕太郎、佐藤春夫、吉川英治氏等とはちがって、あまり世に知られない学者であるが、数学界では、日本的にというより世界的に知られた人であり、今回受賞の運びとなつて、本学に関係する者、大きな喜びでいっぱいである。まして研究を続けられる先生

自然科学部門での文化勲章受賞が内定、十一月三日の「文化の日」に皇居内で行われる文化勲章の授与式に出席される。数学者では、高木貞治氏（十五年）小平邦彦氏（三十二年）について三人目の受賞者である。

岡教授は大正十四年、京都大学卒業後、同学助教授、広島文理大学助

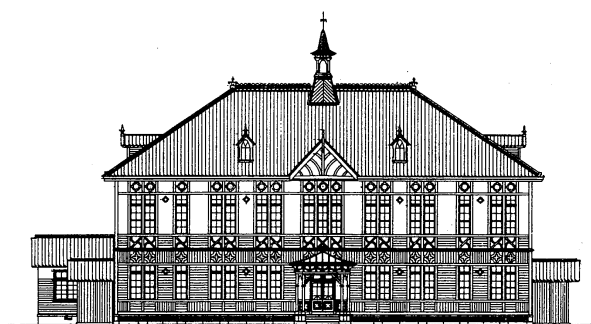
の陰にあつて、苦勞を共にして来られた奥様のお喜びは如何ばかりかと察せられる。

先生の文化勲章受賞を心からお祝い申し上げ、これからもお元気で、研究を続けられんことをお祈り申し上げます。

印刷 者 奈良市法連南町 八 田 徳 治 郎
発行 所 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学内
振替 大阪30417

9 奈良女子大学記念館の展示

奈良女子大学記念館は、明治42年(1909)10月に竣工した
奈良女子高等師範学校の本館(階上講堂・階下校長室、本部事務室)。
設計者は 山本治兵衛(安政元年1854生まれ、大正8年1919 10月歿)。
明治末期の我が国に於ける代表的「**歐風建造物**」のひとつで
平成6年(1994)12月、この**旧本館・守衛室・正門**の3つがセットで



国の**重要文化財**に指定された。

階上の講堂は建築当時の姿をとどめ

階下は資料展示室・会議室、生涯学習室

TEL 総務課 0742-20-3220
(奈良女子大学庶務課 0742-20-3204)

各分野の常設展示の中に次のものがある。

昭和35年(1960)文化勲章授章の**岡潔博士**の写真と自筆遺稿☆

昭和55年(1980)文化勲章授章の**小倉遊亀**(明治28年3月1日生れ)姉
1895

(奈良女子高等師範学校国語漢文部 大正6年卒 平成12年7月23日没)
1917 享年106歳

寄贈「現在の講堂の緞帳の原画 **爛漫** (日本画)」

☆ 講義ノート 解析函数論 1950.5.11(木) 解析学(第一部) 1952.5.13(火)

最初の
日附が
記入されている。 講演草稿(数学に於ける主観的内容と客観的形成について)
(草案) 1953.7.1(水 19.5) 午後7時半のことだろうか。

平成12年(2000)4月29日(土)―5月5日(金)の記念館一般公開で、
「数学者 岡潔博士 自筆遺稿 受贈記念特別陳列」がなされた。
橘の文化勲章も、ガラス越しだったが見せて載けて、光栄だった。

10 岡先生 終焉の地 奈良

岡先生は 昭和39年(1964)3月18日 奈良女子大学 停年退官
同39年4月22日 奈良女子大学名誉教授、43年奈良市名誉市民
昭和53年(1978)3月1日 午前3時33分 高畑の自宅で没。享年78歳

近鉄の奈良駅の東口を出ると、真正面の噴水が目につく。
円錐の頂点に立った小さな佛像、行基菩薩の足元に向って放射される
幾條もの水の軌跡が、地下から上ってきた人々の目を捉えるのである。
だが、その右手前の市民憲章の文字に目をとめる人は殆ど無い。
黒く塗られた文字板に、厚さ5ミリぐらいの銀色の文字の彫刻が

岡
潔
字

貼り付けられた縦書きの「奈良市民憲章」の最後に、左の様に
「岡 潔 字」と書かれている。岡と言う字は、縦3.2センチ横2.3センチぐらい。
春には、文字板は傷ついていて、10月7日に訪れると、真黒に塗り
直され、「奈良は日本のふるさと美しい自然とすぐれた文化遺産を守り」
で始まる市民憲章は、岡先生の優雅な書体で浮き彫りになっていた。
どうか皆さん、奈良へお越しの節には、岡先生の直筆を元に
彫られたこの文字(ステンレス製だろうか)に目をとめて下さい。
「終焉の地」として岡先生が こよなく愛された「古都奈良」
そして、奈良市民も、奈良女子大学の教職員・学生・卒業生も
岡先生を やさしく包んで差し上げた「どしりした奈良の風土と
人びとの心の絆の上に燦然と輝いた 岡先生の文化勲章」
私は誇りをもって奈良を愛し、天上の岡先生の幸をお祈り致します。

参 考 文 献

奈良女子大学 六十年史 昭和45年(1970) 3月25日発行
 奈良女子大学 八十年史 平成元年(1989) 3月25日発行
 奈良女子大学 九十年のあゆみ 平成11年(1999)5月発行
 記念館展示目録 奈良女子大学九十周年記念 (式典は5月15日)

平成11年(1999) 3月

記念館展示目録〔受贈記念 特別陳列〕一般公開
 4月29日～5月5日
 数学者 岡潔博士自筆遺稿

平成12年(2000) 4月

寮史 奈良女子大学同窓会 佐保会 大阪支部編 平成2年(1990)
 3月30日発行
 [奈良女子高等師範学校・奈良女子大学旧寮の変遷]

最後に この研究に 御協力戴きました 奈良女子大学事務局の
 岸田康弘 専門職員 (岡潔博士の紹介 のコピー提供)
 小^ニ刀^と祢^ね英樹 文部事務官 (岡潔教授人事記録等の調査)
 魚^{すずき}盧 武志 理学部教務主任 (岡潔教授の講座の調査)
 に 厚く御礼申し上げます。

平成12年(2000) 8月22日(火) 発表 10月25日(水) 加筆
 元 京都市立日吉ヶ丘高等学校 教諭